

## 景観デザイン教育としてのデザインシャレットの企画運営に関する研究

社会環境工学科 星野裕司

### 1. 緒言

公共空間の整備を行う際、景観・歴史・文化・まちづくりなど、幅広い影響に対する配慮が求められ各専門分野の連携が必要とされる。また、住民参加によるニーズや地域情報など、情報を共有する場や、それらの情報を反映する計画・デザイン・企画・運営力が求められる。しかし、九州の大学が連携し、デザイン教育を行う場は無く、学生・講師・専門家・行政が一同に会してデザイン教育を行う事も無かった。各プロジェクトに対する設計対象地でのデザイン教育や、住民参加は実施されても、短期的である。また、行政、企業、大学が、互いのニーズや技量・ノウハウ・研究内容を知る場も機会も無く、それらは社会に生かされていない。さらに、継続による地元への定着や、充実したネットワークの形成にも至っていない現状がある。

本研究では、実践的に、各専門分野との連携、住民参加の場の提供、デザイン力の育成に対応する「九州デザインシャレット」という場を企画し実施した。実施後、この企画を研究対象とし、企画や運営に対する問題点の抽出を行う。また、直接的・波及的な効果も分析し、教育の場・実務に対応できる人材の育成という視点から考察を行う。さらに、この企画を継続させ、考察を反映させることで、教育プログラムとして確立していく事を目標とする。

### 2. ものづくり研究への貢献と特色

分析対象である、実践的に企画実施した「九州デザインシャレット」について説明する。この初回企画の特徴は、行政から事業における課題の1つが設計課題として提供され、この企画を経て計画・設計案として提案を行う為、成果が残る点にある。また、構成を図-1に示した様に各専門家・講師・学生・行政・住民のコラボレーションが可能となる。さらに、運営は、学生スタッフが行うことで、デザイン力以外にも1つの企画を立ち上げていくというマネジメント力の育成にも繋がる(図-1)。

この企画名でもある「シャレット」という言葉は、「専門家が短期集中して成果を残す」という意味であり、まさにこの企画の性質を示した言葉である。ここでの成果とは、地域が抱える課題に対するヒントであり、住民との情報共有の場であり、参加学生に対するデザイン力やマネジメント力の向上である。これらの成果それぞれが、単独に得られる教育プログラムやワークショップの場は国内において定着しつつあるが、この様にワークショップと教育を兼ね備えた場の企画は、国内でも逸早い試みであり教育研究としても先駆けである。

### 3. シャレットへの準備

まず、宇城市三角町にて開催される「九州デザインシャレット」に向けて、準備活動を行った。それは、

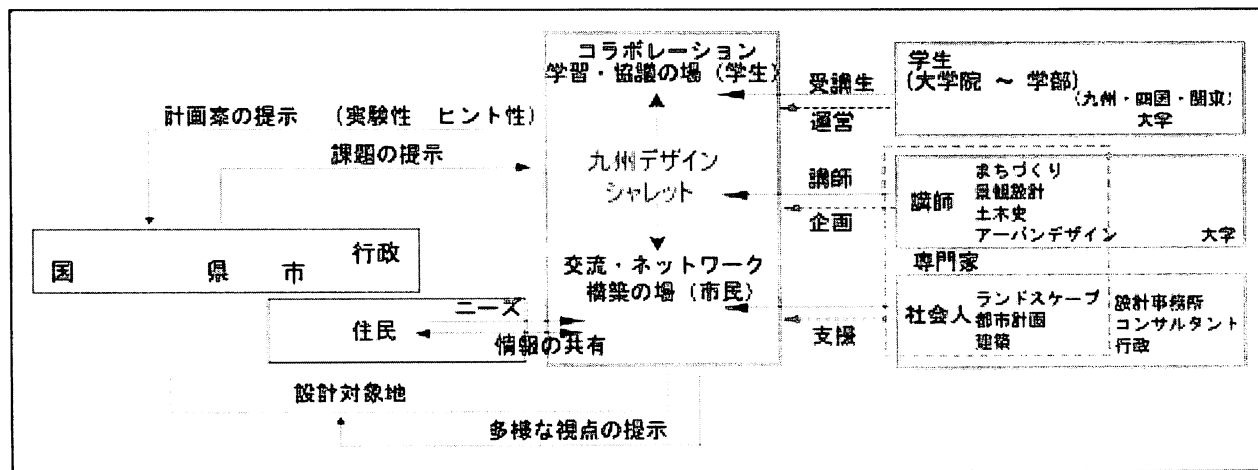


図-1 「九州デザインシャレット」構成図

社会環境工学科にて学部3年生に開講される「社会基盤設計演習」という少人数教育にて行ったものである。ここでは、「まちづくりチーム」(田中助教授担当)、「デザインチーム」(星野担当)という2つのチーム(各チーム7名)を構成した。準備作業の概要は、以下の通りである。

4月：現地調査

- ・三角町の現状の調査

5月 統計資料収集、ヒアリング、現地調査、データのまとめ

- ・現状の三角町の問題点
- ・改善方法の提案
- ・三角町の面白い所探

6月 第一回住民WS開催

- ・WSに向けての準備(PPT作成、図面作成等)
- ・地域住民へ向けて三角町の現状を発表
- ・地域住民から意見を頂く

7月 提案作成

8月 第二回住民WS開催

- ・学生の提案を住民に発表

6月の第一回WSまでは、二つのチーム合同で現地調査などを行い、7月にそれぞれ提案を検討し、8月にその結果を発表した。これらの成果のうち、前半の調査部分は、シャレットでの事前資料としてまとめられ、後半のWSでは、三角町の人々にまちづくりの機運を醸成させる充分なきっかけを提供するものとなった。

なお、まちづくり班の提案は、波多江萌、本田百合絵、高木雄基の3名によってさらに改善され「ものクリ・チャレンジ」の入賞、そして、建設コンサルタンツ協会九州支部主催による「2006年度 夢・アイデア募集事業」において、最優秀賞を受賞しました。

#### 4. シャレットの概要

##### 4.1 シャレット参加者

シャレット参加者の内訳は、以下の通りである。

- ・参加者：30名(うち熊大生：3名)
- ・講師：11名(うち熊大教員：4名)
- ・学生スタッフ：10名(うち熊大生：3名)

シャレットの特徴としてまず挙げられるのが、参加者の出身大学の多様性である。北は北海道大学から、南は南九州大学まで、15の大学からの参加を得ることができた。この広がり、大きな教育効果を生んでいることは、ほぼすべての参加学生が感想に、「初めて出会う人々とのグループワークの困難さ」を挙げていることから理解できよう。



写真-1 準備状況 (WSの様子)

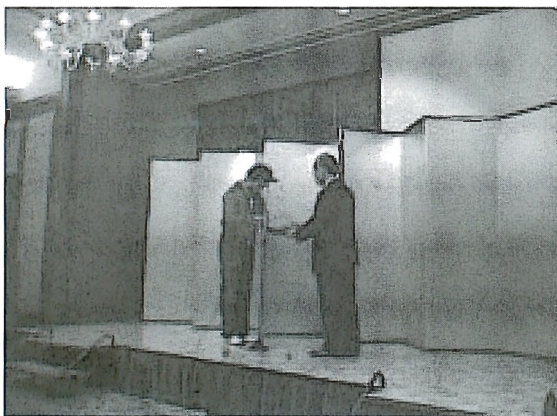


写真-2 「夢・アイデア募集」表彰式



写真-3 学生スタッフ

一方、もうひとつの大きな特徴は、宿舎の手配から課題の設定、開催時のこまごまとした学生のお世話まで、すなわち企画から運営まで、学生スタッフが主体的に行うことである。この学生スタッフも、熊本大学の学生を中心としつつも、九州大学や九州工業大学、福岡

大学のメンバーで構成されており、課題を解く以上の困難を克服することが必要とされた。すなわち、このシャレットを開催することによって、30人参加学生だけではなく、10人の学生スタッフへも大きな教育効果をもたらすのである。

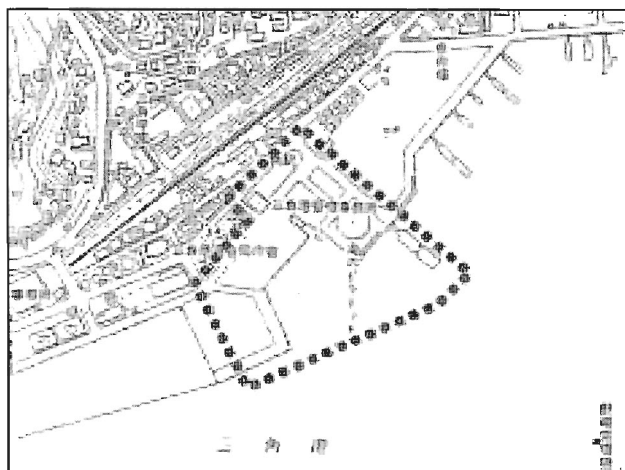


図-2 課題範囲

#### 4.2 課題概要

「シャレット2006」では、三角町を題材として、以下に示す課題を設定した。課題範囲は図-2に示す。

『三角町を元気にする港周辺のデザイン～20年後を考える～』

宇土半島の先端に位置する熊本県宇城市三角町は、穏やかな海と緑の山々に囲まれた自然豊かな町です。国道・フェリー・JRが集中し、古くから天草の玄関口として栄えてきました。

しかし、現在、様々な社会背景により、三角港は次第に港としての機能を失いつつあり、新しい港の在り方が求められています。「みなとづくり」は、三角町にとって、重要なまちづくりなのです。

九州デザインシャレット2006では、様々な分野・年代を超えた学生・若手技術者が、シャレット（専門家が集まり短期集中型で議論し、提案する）というスタイルで三角町の現状と向き合い、三角町に元気を与える「三角町の未来をつなぐ港」をコンペ形式で提案します。

以上のテーマに対して、1/1000と1/300のプログラム案、1/300と1/50の提案模型を提出させた。「シャレット2005」からの改善点としては、課題範囲をおよそ200m×200mの範囲として、空間のデザイン密度をあげることができるに小さく設定し、かつ、1/50とい

う大スケールの提案をもとめたことと、「20年後を考える」という時間軸を設定し、参加学生を一時的な来訪者ではなく、リピーターになったりあるいは移住したりというような、当事者にもなりうる仮定を設けたことである。

#### 4.3 開催概要

以下では、2006年9月11～18日に行われた「シャレット2006」をダイジェストで紹介する。

##### 1日目【知る】

【午前】 ・ガイダンス ・講義：「シャレット06に期待すること」小林一郎(熊本大学教授)

【午後】 ・現地見学 三角西港 ・三角東港見学 クルージング見学

【夜】 ・懇親会

##### 2日目【知る】

【午前】 ・講義：「“スケール感”とは」仲間浩一(九州工業大学助教授) ・高野山視察

【午後】 ・食と農の体験塾 ・テーマ研究/発表会

【夜】 ・班分け

##### 3日目【対話する・考える】

【午前】 ・講義：「“プログラム”とは」鮎川透(株式会社環・設計工房)

【午後】 ・プログラム案作成(1/1000スケール)  
・グループワーキング



写真-4 グループワークの様子

##### 4日目【対話する・考える】

【午前】 ・講義：「“港の景観デザイン”とは」樋口明彦(九州大学助教授)

【午後】 ・プログラム案作成(1/1000スケール)  
・中間発表会(住民の方を交えて)

5日目【対話する・考える】

【午前】 ・講義：「“伝える”とは」田中智之(熊本大学助教授)

【午後】 ・プログラム案作成(1/1000から1/300のスケールへ) ・講師を交えたグループ作業

6日目【形にする】

【午前】 ・デザイン検討(1/300模型を使って検討)

【午後】 ・公開エスキース ・デザイン検討(1/300から1/50のスケールへ)



写真-5 エスキースの様子

7日目【形にする】

【午前～】 ・デザイン検討(1/300模型、1/50模型の作成・デザイン検討)

8日目【伝える】

【午前】 ・プレゼン準備 1/300プログラム案、1/300デザイン提案模型、1/50デザイン提案模型

【午後】 三角の未来を考えるシンポジウム(最終発表会)



写真-6 最終発表会の様子

カリキュラム全体の特徴としては、毎日「知る」から「形にする」までのプロセスをテーマとしてあげていること、そのテーマに対応した講義を1コマずつ行い、景観デザインのプロセスを少しずつ教えていくことや、求める成果品を段階的にまとめさせるということである。これは、ほぼ初学者が多い参加者の能力に配慮したものである。

一方、昨年度からの改善点としてまず挙げられるのは、班分けを当初からするのではなく、「知る」の2日間を終えたあとに行ったことである。これは、班に分かれる前に友人を作ることによって、グループ内でコミュニティを閉じさせずにグループを超えたコミュニケーションを活性化させる効果があった。

中間発表会では約40人、最終発表会では約120人の一般参加者があった。その様子は、新聞等でさまざま報道されるなど、学生への教育効果のみならず、三角町のまちづくりに対しても、大きな貢献をしたということができよう。最後に、最終発表会で最優秀賞を得た提案を載せる。

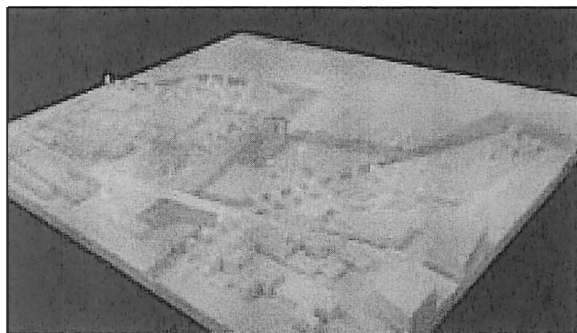


写真-7 最優秀賞の提案模型

5. おわりに

本研究の成果をまとめると以下ようになる。

- 1) 幅広い人材が一同に会する、学際的なネットワークの場をつくることができた。
- 2) 運営を学生が行うことで、マネジメント力を涵養することができた。
- 3) 行政が抱える問題を課題とし、地域密着型の研究を行った。
- 4) 市民を交えた多様な視点の提案を行うことにより、今後の波及効果も大きい。

「九州デザインシャレット」はまだ2回の開催であり、継続して開催されることが最も重要である。07年度は、北九州にて開催される予定であり、それによってまた多くの改善点が挙げられることを期待する。